

谷崎潤一郎『夢の浮橋』草稿の研究

——その四 「ねぬなは物語」——

本稿は拙稿「谷崎潤一郎『夢の浮橋』草稿の研究——その一」「ほととぎす」の秘密——」(『山梨英和短期大学創立三十五周年記念 日本文芸の表現史』二〇〇一年一〇月 おうふう)、「谷崎潤一郎『夢の浮橋』草稿の研究——その二」「五位庵」の位相——」(『学術研究』五一号 二〇〇三年二月)「谷崎潤一郎『夢の浮橋』草稿の研究——その三 母の面影」(『学術研究』五三号 二〇〇五年二月)につづくものである。本稿は伊吹和子さんの手許に残された『夢の浮橋』第一稿のノートを忠実に活字におこし、紹介かたがた『夢の浮橋』を論じたものである。

仮名づかいは原文のままとし、漢字については可能な限り原文の漢字を尊重したが、旧字体か新字体か判読不明なものや、同一字でも旧漢字が使用されていたり新漢字が使用されていたり、略字が使われていたり完璧に再現することは難しいので、常識的な範囲内

谷崎潤一郎『夢の浮橋』草稿の研究(千葉)

千葉 俊 二

である程度統一した。「……」は削除を示し、(……)は加筆を示す。ある部分において煩雑をきわめて読みにくい箇所もあると思われるが、あらかじめご了承を願いたい。紹介者としての私自身の注を加えたところは、(注、……)として処理した。また本文中には(挿入)として、のちに別紙に書き込まれて、セロハンテープで当該箇所(挿入)と張り付けられている部分が多いが、それらの箇所は便宜上(挿入1)といったように、その箇所に通し番号を付して明示し、本文の段落の終わりごとに掲げた。

「札、ちよつとおいで」

と父が私を勾欄の間へ呼び「つ」(付)けて話をしたのは、私が九つになつた年の三月のことであつた。「たし」(確)か夕「餉」(餉)を終へた後夜の八時頃であつた。座には親子二人だけしかゐらないところで、父は少し嚴かな態度で云つた。

「お前はあの、時々こゝへ琴弾きに來た人のことをどう思ふか知らんが、「私」〔儂〕〔わし〕はいろく、お父さんのこともお前のごとも考へ〔て、〕〔た末に、〕今度あの人に嫁に來て「もらお」〔貰はう〕と思ふ、お前も今年は三年生になるのやさかい、わしの云ふことをよう〔注、〕〔聞〕の略字体が書かれてる」〔聞〕き分けて欲しい、〔〕お前も知つてるやうにわしは死なはつたお母さんをごの上もなう「可愛がつて」〔大事がつて〕たんや、お母さんさへ達者やつたら、何もお父さんは外のもんいらなんだ、そのお母さんが「えんばんと」あないして急に死んでしまはつたんで、お父さんほんまにどうしたらえ、か分ら（せ）なんだ、さうするうちにひよつとしたことであの人と知り合ひになつた、お前はお母さんの顔をはつきり覺えてやせんさうなが、今にきつと、いろんなどこであの人がお母さんに似てることを〔注、〕〔思〕を書きかけてやめてる」〔悟〕〔思ひ當る〕るやうになると思ふ、似てるちふたかて、「双子」〔雙児〕か何ぞやない限り、他人同士でほんまに生き寫してな人があるもんやあらせん、似てるちふのはそんなこつちやなうて、顔の感じやら、もの、云ひ方やら、體の（こなし）工合やら、「やさし」〔へい〕〔優しい〕だけやなうて、奥行き深い、ゆとりのある性^よやら、さういふもんが、あの人はお母さんにそっくりやのや、「お母さんが死なはつてから」あ、云ふ人に行き「あは」〔合〕さなんだらわしかて二度目の嫁さん持つたりする氣いあらせなんだ、あ、云ふ人があやはつたさかいこそ、こんな氣イになつたんや、ひ

よつとするとお母さんが、お父さんやお前の為思うてあの人を廻り逢は（さ）してくれたんかもしれん、これから先、「お前を大つきいして行く為にも、」あ、云ふ人「に」〔が〕ゐて「もらはんと、何かにつけて、工合悪い、」〔くれたら〕お前を大きいして行く為にもどない助かるや知れんと思ふ、（ついではお母さんの三回忌も濟んだこつちやし、今が、え、折やと思てるのや、）なあ、「お前」〔礼、〕わしの云うたこと、分つてくれ「る」〔た〕やるな、」私が黙つて「肯」〔頷〕いてみせると、

「それが分つたら一つ、知つといて貰ひたいことがある」と父は重ねて云つた。

「あの人が來たら、お前は二度目のお母さんが來たと思たらいかん、お前「の」〔を〕〔生んだ〕お母さんが今も生きてゐて、しばらく何處ぞへ行てた人が歸つて來やはつたと思たらえ、、わしがこんな「注、」〔事〕を書きかけてやめてる」〔こ〕と云はいでも今に自然さう思ふやうになる、前のお母さんと今度のお母さんが一つに「継」〔繫〕がつて、區別がつかんやうになる、前のお母さんの名アは有為子（注、右横に鉛筆で傍線を引いている）、今度のお母さんの名アも有為子（注、右横に鉛筆で傍線を引いている）、その「ほか」〔外〕、することかて、云ふことかて、今度の人は前のお母さんとおんなしやのやぜ」

それから後「も、」〔は、〕父は朝夕佛壇を拜む時、以前のやうに私を「傍にすわらせて」引き寄せて長い間すわらせたりはしなかつた。

讀誦の時間もだんく短くなつて行つた。そして間もなく「式」(たしか四月に這入つてからの或る夜、勾欄の間で式)が擧げられ、「」たことは「覚えて」(知つて)ゐるが、披露の宴などは何處かの料亭で催されたのかどうか覚えがない。式も思ひの外質素で、執方側の親戚もほんの二三人しか並んでゐなかつた。父は明る日から「有為子(注、右横に鉛筆で傍線を引いている)、有為子(注、右横に鉛筆で傍線を引いている)」と呼んでゐたが、私も「さあお母」「さん」(ちゃん)と呼ぶのや、「思ひの」(と云はれて、案)外氣安く「お母」「さん」(ちゃん)」

と云ふ(言葉を出す)ことが出来た。(二三年この方)父と襖一重を隔て、八「帖」(疊)の間で寝る「ことに」(癖が)ついてゐた私は、「その人」(新しい母)が來「てか」た夜から再び乳母と六「帖」(疊)の茶の間で寝た。父は新しい妻を得て、すっかり満足してゐるらしく、亡き母の時と同じやうな夫婦生活を送りつゝあつた。昔からゐた乳母や女中達も、かう云ふ場合兎角の噂をしたがるものだが、今度の人に不思議な仁徳が備(注、右横に鉛筆で「具？」と書かれてゐる)はつてゐるのでもあらうか、皆よく「なつ」(懐)いて、昔の人に對するのと變りなく仕へた。(家の中の) (注、「總」と書きかけてやめてゐる) (す)べての「生活」(仕來り)が又昔の通りに「な」(戻)つた。父や母の傍(注、右横に鉛筆で「かたはら(ルビ)」と書かれてゐる)「ら」にすわつて母の奏でる琴の音に耳を傾けることも、亡き母の在りし日と同じであつたが、琴も根引

きの松の模様のある遺愛の品が持ち出されて、「それから」(いつ)(何時)もそれが用ひられてゐた。夏は池へ床を出して親子三人で夕餉を攝(注、欄外へ鉛筆で線を引き、「取？」と書かれてゐる)つた。父は添水の水の落ち口へ行つてビールを冷「や」した。母は床から足を垂らして池の水に浸した。池の中で透き通つてゐるその足を見ると、はからずも私は昔の母の足を思ひ出し、あの足もこの足と同じであつたと云ふやうに感じた。いや、もつと正直のことを云ふと、昔の母の足の記憶は既に薄れて消え去つてゐたのが、たま／＼この足を見て、これと同様であつたやうに思つたのかも知れない。さう云へばこの人も枕の中の蓴菜を「ねぬなは」と云「つた」(ひ)深泥池の話をした。そして、

「糺さん、今に学校で古今集の話教へてお貰ひるやろけど、そんなこんな歌がありますのえ、

隠り沼の下より生ふるねぬなはの
寝ぬ名は立たじ來るな厭ひそ」

と云つた。

(注、文頭に鉛筆で「」の印がある。一字下げ)前にも云ふやうに、この足の話、ねぬなはの話等々は、昔の母の時に感じたり聞かされたりしたのが初めて、この時が二度目であつたやうにも思ひ、又この時が最初であつたやうにも思ふ。父は「務めて」務めて昔の母の云つたことやしたことを今の母のそれ等と繋ぎ合せ、私に生母と繼母との區別が「つ」(付)かなくなるやうに仕向け、今の母に

もその心得を云ひ聞かせてゐたのに違ひない。

(注、文頭に鉛筆で「」の印がある。一字下げ) 或る晩、(その年の秋であつたと思ふ) 私が「茶の間で」(乳母と)寝ようとしてゐると、母が這入つて来て云つた。

「糺さん、あんた五つ位になるまでお母ちゃんのお乳吸うておゐたの覺えとゐるか」

「ふん、覺えてる」

「そして、「いつ」(何時)でも「いつ」(何時)でもお母ちゃんに子守唄歌うて貰たことも覺えとゐるか」

「ふん覺えてる」

「あんた今でもお母ちゃんにそないして欲しとお思ひやへんか」

「して欲しことはして欲しけど」

私は流石に胸がときめくのを覺え、顔を「赤」(赧^{あか})らめながら云つた。

「そな今晩はお母ちゃんと一緒に寝まへう、こつちいおいなはい」

〈母は〉私の手を取つて十帖の間へ連れて行つた。夫婦の寢床は延べてあるが、父はまだ「寢」(臥)てゐない。母も寢巻き姿ではなく、晝夜帯を締めたまゝである。天井には電燈が「燈」(ともし)つてゐる。添水の水音がパタン／＼と聞える。すべてが昔の通りである。母はそのまゝ、ごろりと「寢」(臥)て、鬢の頭を船底形の枕に乗せ、

「お這入り」

と云つて掛け蒲團を擡げて私を入れた。私は最早背丈も伸び、小柄な母の顎の下へ身を埋める程小さくはなかつたけれども、顔と顔とを突き合せるのもきまりが悪く、わざと身を屈めて蒲團の中へ體を「縮」(ぢぢ)めた。と、丁度私の鼻のところに母の着てゐる半衿の合せ目があつた。

「糺さん、お乳吸ひたいか」

と頭の上で母の聲がした。母はさう云つて、「(注、「み」を書きかけてやめている)」自分も顔を俯「向」けて蒲團の中を覗き込んだ。母の前髪が冷たく私の額に觸れた。

「長いことはあとばかりねんねしてて、ほんまに淋しかつたやろえな、お母ちゃんと寝たかつたら何でさうやと早う云うておくれやへなんだんえあてに遠慮し「て」(と)ゐたのか」

私が頷くと

「けつたいな児オえなあ、さあ、遠慮せんとお乳のあるところ捜しとおみ」

母がさう云ふと私は両手で半衿の合せ目を押し開き、ふつくらとした乳房(と乳房)の間に、「」(顔を押しつけ)両手で乳「房」(首)を暫くの間弄んだ。母の顔が上から覗き込んでゐるので、その隙「き」間から電燈の明りが漏れた。私は右と左の乳首を「交」(代)る／＼口の中を含み、頻りに舌で吸ひ上げてみたけれども、乳はどうしても出て來なかつた。

「あ、こそば」

「ちつとも乳出て来やへん。吸ひ方忘れてしまつたんやろか」

「堪忍え、今にや、さん生んで乳が仰山出るやうになるまで待つて、や」

「」さう云はれても私は乳「房」を離さうとせず、いつまでもく「舐」り續けた。いくら吸つても出ないことは分つてゐても、そのふつくらした突端の、小さくぷりくしたものを口に含んでゐるだけで楽しかつた。

「えらい濟まんえなあ、そない一生懸命になつてるのに」「へ」出えへんのに吸ひたいのか」

私はこくんくと頷「いて吸つた。」へきながらなほ「吸ひ續けた。」吸ふことを止めなかつた。昔の母の懷ろに漂つてゐた髪の毛と乳の匂ひの入り交つた甘つたるい「夢の世界」「匂ひ、」世界が、乳の匂ひはする筈がないのに、連想作用でそこにあるやうに感ぜられた。あの、髪の毛と乳の匂ひの入り交つた、生ま暖かい懷ろの中のはの白い夢の世界、昔の母が亡くなると共に何處か遠くへ持ち去つて「再び戻つて来なかつた」へしまつた」世界が、思ひがけなくも再び戻つて来たのであつた。

ねんねなされよ寝る子は可愛い
明けりやお寺の鐘が鳴る

と、昔のリズムと同じリズムで母はあの唄を歌ひ出した。しかし私は感動の餘り折角その「歌」へ唄を聞かされても、「眠りに入ることは出来なかつた。」その夜は容易に寝「つく譯に行かなかつた。」

付かれず、ひたすら乳首に嘔りついてゐた。

(注、文頭に鉛筆で「」の印がある。一字下げ)かう云ふ風にして、私は半年程の間に、昔の母を忘れたと云ふ譯ではないが、昔の母と今の母との切れ目を見失ふやうになつた。昔の母の顔を思ひ出さうとすると「、」今の母の顔が浮び、昔の母の顔を思ふと、今の母の聲が聞えた。次第に昔の母の影像がびつたり今の母の影像になつてしまひ、それ以外の母と云ふもの「を」へは考へられないやうになつた。父が私をさう云ふやうにしようと「計畫」したこと、すつかり思ひ通りになつた。私はやがて十三四「歳」へ「なり、夜は獨りで寝るやうになつたが、さうなつても時々母「が」へ「懷」(注、一字読み取り不能)へ「ろ」が戀しくなると、「お母ちゃん一緒に寝させて」

とその懷ろを押し明けて出ない乳を吸ひ、子守唄を聞いた。へそしてすやくくと眠つてしまふと、いつの間に運ばれたのか、朝眼を覺すと六帖の間に一人で寝てゐた。母は「一緒に寝させて」と云ふと「母は」喜んで云はれる儘にし、父もそれを許してゐた。

(注、文頭に鉛筆で「」の印がある。一字下げ)私はこの母が何處に生れ、どう云ふ生ひ立ちをした人で、どう云ふいきさつから父のところへ嫁ぐやうになつたのか、長い間知らなかつたし、誰もそのことに「就」「つ」へ「就」いて私に語つてくれる者はゐなかつた。戸籍を調べれば何かの手懸りが得られるであらうとは思つたけれども、「この人を「真」へまこと」のへ生みのへ母へだ」と思へ、「」

母が二人あつたと考へてはならぬ」と云ふ父の云ひ付けを守り、私は（自分が自ら）進んでさう云ふ調査をすることを恐れてもぬた。

が、近衛中學を出て三高へ入學する時に、戸籍抄本を取る必要があり、その時今の母の本名は「號」（注、欄外へ線を引き「有為子」とある）ではなくて「靜」であることを知つた。「そして」（すると）

その翌年、長年勤めてゐた乳母が、五十八歳で暇を貰つて故郷の「丹波」（長濱）へ歸ると云ふ時であつた。或る日二人で下鴨神社（注、ここから欄外に鉛筆で線を引き、「十月中・下旬ノ季節ヲ入レル」と書かれてゐる）へお参りをしたことがあつたが、乳母はお賽錢を上げて拍手を持ち、

「もうこのお宮さんにも當分お別れでござりますなあ、」

と感慨深げに云つた後、

「ほんさんちよつとお散歩致しまへうか」

（と、森の中の「散」（參）道を葵橋の方へ歩いて行つたことがあつた。その時乳母は何と思つたのか、

「ほんさんはもう何でも彼でも知「つてお」（つと）ぬやすのでござりますやろ、」

と突然妙なことを云つた。

「知つてゐる何のことをや」

「何のことで、お分りいしませんのやつたら止めときますけど」

「まあ何のことか云うてみい」

「云うてえ、やら悪いやら」

と乳母は「獨り言のやうに云つて、」變に氣を持たせながら、

「ほんさんは今のお母さんのこと、もうたいがい知つておぬやすの（「やござりまへんか」と違ひますか、」

「い、や、知らん、」「たゞ靜云ふのが本名やちふことだけは知つてる、」

「どうして（それ）お知りやしたのでござります」

「去年戸籍抄本取らんならんことがあつたさかい」

「ほんまにそれだけしか御存知やござりまへんか、」

「それ以上は何も知らん、お父さんも知つたらいかんて云ははるし、

「乳母」お前「も」（かて）何も教えてくれへんもん、もうそのことは聞かへんことに決めてんのや、」

「私も御奉公致しとります間は申し上げんをりましたけど、丹波の田舎へ歸りましたら今度いつほんさんにお目にかゝれますや分ら

「いた」（致）しまへんさかい、矢張りこのことは「知」知つて、いただきます方がえ、かしらんと思ひます」「お父」旦那さんには内證でござりますけど」

「まあ、その話は止めにしといてくれ、僕はお父さんの云ひ附けを守つた方がえ、と思ふ」

私は口ではさう云つたけれども、

「そ」（さ）うでもいづれはお分りやす（注、一字ないし二字読み取り不能）て（こつて）ござりますし、どうしたかて知つとぬやす方がよろしござりますえ、」

と乳母が參道を「行」二度も三度も「行」へ「往」つたり還つたりしながら、ぼつりくくと洩らす言葉に魅き込まれずにはゐられなかつた。

(注、文頭に鉛筆で「」の印がある。一字下げ)「私も世間の噂を聞いただけでござりますので、確かなこつちやござりまへんけど」「」と云ひながら乳母は次のやう「(注、「に」の変体仮名を書き消している)」に語つた。

(注、文頭に鉛筆で「」の印がある。一字下げ)「傳聞に依ると、今の母の生れた家は二條邊で、「式紙」色紙短冊(筆墨)の類を「取り扱つ」(賣り捌い)てゐた大きな(構への)店で丁度今の鳩居堂のやうなものだつたと云ふ。だがその家は母の十歳餘りの時に分散して、今はその跡も残つてゐない。その後母は十二歳の時に祇園の某家に養女として身を賣られ、十三歳から十六歳まで舞妓をしてゐた。その時の藝名、藝者屋の名等も調べれば分るであらうが、乳母は知らない。十六の時、綾小路西洞院の木綿問屋の若主人に身請けされて、その家の嫁に迎へられた「」と云ふのであるが、正式の妻であつたとも云ひ、入籍はされなかつたとも云「ふ」。(ひ)その點は確かでない。兎に角本妻同様の待遇を受けて、足掛け四年、大商店の若奥さんで納まつてゐたが、十九の年に事情があつて不縁となつた。事情と云ふのは、親達や親戚の壓迫があつて追ひ出されたのだとも云ふし、道樂者の夫「が」(に)飽きられたためであるとも云ふ。「出さ」(別)れる時に、相當な手當を貰つて出たので、

(たものに違ひないが)「母は眞葛ヶ原の近く「の」(に)小綺麗な一戸を構へ、その後暫く琴や三味線を教へながら暮らした」。(注、別紙に「母はその後六條邊に逼塞してゐた親達の家に戻り、二階を稽古場にあて、隣り近所の娘達に、茶の湯や生け花を教へて暮した。」と書き直された)父が母を知つたのはその頃のことであるらしいが、どう云ふ機會にどう云ふふうにして逢つたのか、それから五位庵へ嫁いで来るまで父と母とは何處で逢瀬を重ねてゐたのか、それらの「内情も」(詳しいいきさつ)は分つてゐない。「父があんなに愛してゐた「第一」(最初)の妻に死なれた後、一年も経たずに今の母を戀するやうになつたとは考へられないことなので、父が先妻に死別してから第二の妻を迎へるまでには、二年半の月日を經てゐる。今度の方が昔の人の面影をどんなに傳へてゐたにもせよ、父はあんなに愛してゐた昔の人に死なれてから、一年も經ずに(今の人に)魅かれるやうになつたとは考へられないことなので、恐らく彼が今の人を迎へ入れる「氣になつ」(決心を固め)たのは、恐らく結婚の一年位前のことであつたらう。前の人は歿年が「二十」(廿)三歳、今度の方は結婚したのが廿一歳、父は今度の人より十三年上の、「三十」(卅)四歳、私は十二年下の九歳であつた。

(注、文頭に鉛筆で「」の印がある。一字下げ)私は初めて母の素性を明されて少なからず驚くと、もに、いろく思ふところがあつた。殊に母が「三四年の間にもせよ」(十三歳から十六歳まで)「花柳界「(狭斜の巷)に」「育つ」(身)「籍」を置いて」た人である」(祇

園町の妓籍にあつた」と云ふことは、想像もしなかつたことであつた。尤も良家の子女として生れ、数年の後に落籍されて大家の若奥さんとして暮したのであるから、その間にさまざまの教養を積んだことであらうし、尋常一様の舞妓上りとは違ふけれども、それにしてもあの「鷹」〈鷹〉揚な悠々とした「天」〈稟〉〈稟〉の性格をよく疵附け（注、鉛筆で脇に「？傷つけ」と書かれている）られることなく、「」保つて来たものと感心させられる。それにあの品のい、昔の町家の匂ひを止めてある言葉遣ひはどうであらう、譬ひ三四年でも花柳界にゐたとすればさう云ふ社會のもの、云ひぶりが少しは出て来さうなものなのに、それが残つてゐないと云ふのは、恐らく木綿問屋にゐた時分に夫や舅姑に喧しく仕込まれたせゐでもあらうか。私の父が〈たま〜〉孤閨の寂寥を嘆いてゐる時に、かう云ふ人に魅せられたのは當然である。「が、」と云つてもよく、この人ならば亡くなつた妻の美德をそのまゝ、引き継がせることが出来る。「」よう、そしてその人の忘れ形見である私「を」「の」「へに」母を失つた悲しみを忘れさせることが出来よう。「」と考へるに至つた「ものと思はれ」〈へのも自然であると考へ〉る。私は父が自分のためばかりでなく、「どんなに深く」私のため「を」〈へにどんなに深く〉考へてくれ「たかを思ひ、私に二人の母がゐたと云ふ考へを取り除くためには並々ならぬ苦勞をしたのに違ひないと思ふと、」〈へてゐたことかは、察するに足りる〉。今の母を昔の母の鑄型に嵌め、私をして二人の母を一人の母と思はせるやうにするためには、今の母そ

の人の「教養と」心懸けもあつたであらうが、〈主として〉父の並々ならぬ努力の結果であつたと云はねばならない。父は今の母と私に傾けた「愛」〈愛〉を通して、最初の母への思慕の情をまずく強めてゐたものとも云へる。〈さう〉してみると、今の母の前半生の祕密を乳母から聞かされたことは、折角の父の心盡しを無にしたやうにもなるが、一面私はそれに依つて、父「に對する」〈へへ〉感謝と、今の母への尊敬の念をいよく深めたのであつた。

すでに指摘したように、ノートの最初のページには欄外に『古今集』から忠岑の「隱沼の下より生ふるねぬなはの寝ぬ名は立たじくならないとひそ」という一首が記され、谷崎はこの作品の題名として『夢の浮橋』とともに、『ねぬなは』あるいは『ねぬなは物語』という題名をも考えていたようである。この間のいきさつを伊吹和子さんは『われよりほかに 谷崎潤一郎最後の十二年』で次のように回想している。

先生は題名を、「夢のうきはし」と書くように言つてから、

「ええっと、その横にね、ネヌナハと書いてみて下さい。『ねぬなは』か、『ねぬなは物語』という題もいいかもしれないと思つてるんですね」

とおっしゃつた。ネヌナハとは日本料理の吸い物や酢の物に使う水草の「蓴菜」の古語であるが、ただ、旧仮名遣いの平仮名で「ねぬなは」と書くと、何のことかさっぱり判りそうもない。

私も自分の手で書き並べてみた文字の羅列が、想像以上に不可解に見えるのに驚いたが、先生も、これでは読者に不親切な題になって具合が悪いね、と言いながら、まあ消さずにおきましよう、と、未練を残しておられた。小説の題名が『夢の浮橋』に決ったのは、一ヶ月足らずかかって初稿が完成した後、いよいよ原稿用紙を前に、決定稿を口述された時である。

作中において「ねぬなは」がかかってくるのは、幼い糺が吸物椀に浮いている蓴菜を見て不審がり、生母がその名を「ねぬなは」と教えて古歌を口ずさみ、それから一家の人たちや出入りの料理人までが蓴菜といわずに、「ねぬなは」というようになったという場面（最初この場面は蓴菜の吸物ではなく、一家が鮎の塩焼きを雪洞の明かりの下で食べるという設定になっていたということは「其二」ですすでに指摘した）と、生母の死後に新しい母を迎えて、以前と寸分違わぬ夕餉の情景が展開され、継母もやはり「椀の中の蓴菜を『ねぬなは』と云」い、最初に引いた忠岑の歌を口ずさんだという場面の二箇所である。伊吹さんは、「『ねぬなは』は、この二カ所に出て来るが、はじめに考えておられた『ねぬなは物語』の『ねぬなは』は、結局これで終りになった」と指摘しておられる。

が、『夢の浮橋』はその発想にかかわり、この壬生忠岑の歌が思いの外に、大きな意味をもっていたのではないかと私は推測している。たとえば『雪』において、谷崎は地唄の「雪」を聞くと、その詞章から「限りなくさままぐな連想があざやかな形を取って浮か

び来り浮かび去るのを禁じ難い」といい、その具体的なイメージをたぐり寄せて生き生きと描きだしているが、和歌や歌謡などの切れな詞章から具体的なイメージを喚起し、ひとつの物語世界の核となしてゆくという手法は、谷崎にあつてきわめて重要な創作方法のひとつだった。そもそも『夢の浮橋』は一首の歌をめぐるエピソードから語りおこされるが、その歌が「ほと、きす潺湲亭に來鳴くなり源氏の十卷成らんとする頃」という自製の歌を詠みかえたもので、この歌にまつわるもろもろの事柄が『夢の浮橋』の発想に深くかわることはすでに「その一」において指摘しておいた。この忠岑の「隠沼」という一首もそれに劣らず、『夢の浮橋』の成立過程において、谷崎の想像力を強く刺激するものとしてあつたと思われるが、そうであればこそノートの最初のページに『古今集』から忠岑の一首も書きとめられていたのだろう。

「隠沼」は草などに隠れてよく見えない沼、あるいは水の流れて行く出口のない沼のことであり、『万葉集』の「隠沼（こもりく）の異訓から生じた歌語である。『万葉集』でも「隠沼の下延へ置き」（巻九、一八〇九）「隠沼の下に恋ふれば」（巻十一、二七一九）のように、「下」にかかる枕詞として詠まれることが多いが、「隠沼の下ゆ恋ふればすべを無み妹が名告りつ忌むべきものを」（巻十一、二四四一）と、外部への露頭が許されぬ苦しい恋心を表現したり、他人や世間から遮断した心の奥底に潜む真意をあらわす語として用いられたりする。何やら日常においては意識にのぼらないが、誤って

一步を踏み出すと底なしの深みに足を取られてしまう沼のような無意識の世界を連想させる語句であり、その「下より生ふるねぬなは」は、そうした無意識の領域からいつとはなしに頭をもたげてくる欲望のごときものをイメージさせよう。

「ねぬなは」は蓴菜の古語であり、蓴菜はスイレン科の多年生水草で、泥中に地下茎が伸びて節ごとに根を下ろし、長い葉柄があって楕円状楕形の葉は水面に浮かんでいる。茎と葉の背面や若芽などは寒天状の粘液で覆われてヌルヌルするが、一面不気味で、気持ちの悪い、そうしたヌルヌルしたものへの親和は、あの『憎念』の主人公の「グニヤグニヤした、柔かい、粘ツこい」ものへの執着と同様、幼児性欲と深くかわるものなのだろう。そして「隠沼の下より生ふるねぬなは」は、全体で同音の「寝ぬ名」を言いおこす序詞となっており、以前にも指摘したことではあるが、それはそのまま識域下に隠された無意識層に根を下ろした幼児的エロスとも結びついたものとなっている。

「寝ぬ名」は共寝をしないという噂で、「寝ぬ名は立たじ」は、寝ぬ名は立ちますまいという意であるが、今日一般的に流布している『古今集』は、定家本系統の「隠沼の下より生ふるねぬなはの寝ぬ名は立てじくるないとひそ」と、こここのところが「寝ぬ名は立てじ」となっている。谷崎がこの歌をどの本から引いてきたのかは不明だが、竹岡正夫の『古今和歌集全評釈』(昭和五十一年十一月 右文書院)によれば、ここを「寝ぬ名は立たじ」としている本文は契沖

の『古今余材抄』、賀茂真淵の『古今和歌集打聴』、本居宣長の『古今集遠鏡』、金子元臣の『古今和歌集評釈』などであるというから、いずれにしても谷崎はその系統の本文によったのであろう(注1)。「くるないとひそ」は、私に通って来るのを嫌がるなの意で、「なそ」は禁止を表し、「来る」を「ねぬなは」の「なは(繩)」の縁語である「繰る」に掛けている。

しかし、それにしても「くるないとひそ」といいながら、「寝ぬ名は立たじ」あるいは「寝ぬ名は立てじ」というのは、何か理屈に合わず、論理的に矛盾しているようである。たとえば小沢正夫・松田成穂の『新編日本古典文学全集11古今和歌集』(一九九四年十一月 小学館)では、こここのところを「寝ぬ」は「寝ない」とも解せるが、『寝ぬる』とあるべきところを『ねぬなは』と同音にするために終止形の『ぬ』を用いたのだろう」と解釈し、「あなたと共寝をしていないのに、共寝をしたという噂は立てないつもりですから、ご心配ご無用です。私の来るといふ噂がたつのをいやがらないでくださいよ」と訳している。現在流通しているこの歌の解釈は大方向でおこなわれているが、こうした解釈はあまりに現代風で合理的に意味をとろうとしすぎているのではないだろうか。

この歌の理解のためには、これが『古今和歌集』巻十九「雑躰」のなかの「誹諧歌」に収載されたものであることをおさえておかなければならない。菊池靖彦によれば、「誹諧歌」は、従来、「誹諧」の字義に引かれてもっぱら滑稽な性質を有する歌とされてきたが、

何がどのように滑稽であるのかという点になると、はなはだ分らないところが多いという（『古今集』『誹諧歌』論）『日本文学研究資料叢書 古今和歌集』所収）。そして氏は、『古今和歌集』の「誹諧歌」には、「心」と「詞」との間にながしかのアンバランスが生じて、それがおかしみになっているものが多く、「卑俗であることと共に、表現の誇大さ、奇矯さ、幼稚さといったことも」その特色で、「みやび」をねらう理知的な表現が過剰になって、いおうとする歌の心との間にアンバランスを生じ、「たしかにひとふし面白く、捨て難いのだが、どこか正格を逸脱した滑稽さ」をもつと指摘している。

また折口信夫は「誹諧歌の研究」〔折口信夫全集 第十卷〕所収において、「誹諧歌」は諺に深いかかわりをもち、「周知の語であり、誰でも言ふ所の言ひまはし方であつたのを、短歌の形に固定させた」ものとしている。こうした視点から「隠沼の」の歌を読み直すならば、「寝ぬ名は立たじ」あるいは「寝ぬ名は立てじ」といった性的連想をとまなう語が、自己の思い人への欲望の言い回しとして一般に弄ばれて、それに誹諧味をもたせながらひとつの歌のかたちにまで表現したものと解釈することも可能だろう。「寝ぬ名は」から菓の「ねぬなは」を言語遊戯的に連結し、「寝ぬ名は」立ちまぜんから、あるいは「寝ぬ名は」立てまぜんから「くるないとひそ」と反語的に問いかける、こうした言語上の遊戯がおかしみ、滑稽を誘発し、その詭弁的效果を娛しむことができる。「誹諧歌である以上

は、真実から、或距離、或事を感じさせねばならぬ。其を示すのも、言語の為事である」というわけである。

また折口は誹諧歌と『万葉集』卷三にある持統天皇の「いなと言へどしふる志斐しひのがしひ語り此ごろ聞かずて我恋ひにけり」、これにこたえた志斐しひの「いなといへど語れくと宣のたまらせこそ志斐しひは奏たませしひごとと宣る」とある「しひ語り」との関連をも指摘している。

こゝに誹諧と、元来別途を歩んだ滑稽のあつた事を述べて置く必要があるはしないか。其は、「をこ物語」の系統に属するものである。謂はゞ内容の滑稽的と言ふべきものだが、元来極めて、下が、つた笑ひを目的としたものであつた。「笑ひ」は、元来祭祀儀礼に於いて、重要な位置を占めるものであつた。笑ひは、神の合意のしるしである。其為に出来るだけ、神を笑はしめて、神の然諾を信じようとする。さうした出発点を持つて居る笑ひの材料は、常に、下が、つた動作なり、其記憶を呼び起させる物語及び説話の復習であつた。語部の物語が「しひ物語」になると共に、「をこ物語」としての要素を、十分に含んで来る。さうして、邑・家・国の語部の流離と共に、此が諸国に撒布せられる様になる。

新撰姓氏録には、阿部ノ名代なしろが楊やなぎの花を辛夷しんいの花と強弁し、天子が名代に阿部ノ志斐の姓を賜つたとあり、阿部ノ名代のしひ語りから阿部ノ志斐ノ連は出てると伝えているという。「しひ語り」の

「しひ」とは、「強ひ」であり、事実を曲げて強弁することであるが、志斐の名に通ずる「誣ひ」の意もこめられており、「まこととしひとの界は、謔なり歌なりの、解説にあるのだと思ふ」と折口はいう。とするならば、「寝ぬ名は立たじくならないとひそ」は、たしかに「寝ぬ名」共寝しないという噂）は立たないが、共寝をしたという噂は立つかも知れず、決して虚偽ではないのだけれど、真実そのものを言い表したものでもない。そして、同音の「ねぬなは」(蓴菜)に連結させて言語遊戯的にそれを見事に「解説」してみせたところに、この歌の妙味があるということになる。女への「くならないとひそ」という問いかけは論理的に整合性をもち得ないが、それを「寝ぬ名は立たじくならないとひそ」とあえて強弁したところにこの一首の「しひ語り」としての誹諧味があった。

ところで私はこの「隠沼の」の歌を生母ではなくて、継母が口ずさむところに意味があるということ。「その二」で指摘しておいたが、先にも見たように初稿の段階では生母との夕餉のエピソードには蓴菜の吸物はなく、雪洞の明かりの下で一家が鮎の塩焼きを食べるという設定になっていた。ということは、生母との関連においては「ねぬなは」(寝ぬ名は)のエピソードは念頭になく、「寝ぬ名は」の一首は継母とのかかわりにおいてこそ意味をもち、主人公と継母との関係においてとらえられていたということを示唆する。いうまでもなく、主人公の糺は、のちに乳母から世間で糺と継母との間に「不倫な関係」があると噂され、「それどころか、人目を忍んで丹波

の田舎へ里子に遣られた武と云ふ子は誰の子なのか、あれは父の子ではなくて忪の子なのではないか、と、そんな浮説を流す者さへある」ということを知らされる。文字通り、糺と継母の間には「寝ぬ名は立たじ」で、共寝をしたという噂が流出することになるのだ。

しかも、この歌のエピソードが語られた直後に、おそらく父の意向を受けて「糺さん、あんた五つぐらゐになるまでお母ちゃんのお乳吸うておゐたの覚えとあるか」と幼い糺を共寝に誘うのは継母であり、のちに合歡亭での乳を搾っている継母と行きあわせ、「あんた今でも乳吸うたりお出^で来るやろか、吸へるのやつたら吸はしたげろ」と、間接的な共寝への誘いを仕掛けるのも継母である。「隠沼の」の一首における「くならないとひそ」は、女のもとに通う男が自分の通ってくるのを嫌ってくるなというわけであるが、『夢の浮橋』においては継母が義理の息子である糺に私が誘いにくることを厭わないでくださいとの含意に移行され、見事に忠岑の歌が換骨奪胎されている。

そればかりではない。のちに主人公はこの手記について「こゝに記すところのすべてが真実で、虚偽や歪曲は聊かも交へてないが、さう云つても真実にも限度があり、これ以上は書く訳に行かないと云ふ停止線がある。だから私は、決して虚偽は書かないが、真実のすべてを書きはしない」という。こうした手記執筆の方法は、いうまでもなく、決して虚偽を語るわけではないが、それだからといって真実のすべてを語るわけでもない、一種の「しひ語り」として反

語的な、多分に詭弁的に強弁を弄する「隠沼の」という一首の誹諧歌のありようと類似する。おそらく『夢の浮橋』の発想に根底にはこの忠岑の一首から受けたインスピレーションがあり、作者はその内容ばかりか、一編の語りの要諦をもこの一首からヒントを得たのであろう。

さて『夢の浮橋』は世間から閉ざされた五位庵の閉塞的な空間において物語が展開するが、世間との通路を用意するのが乳母の存在である。乳母は二度にわたって主人公を糺の森に誘い出し、主人公には遮断された情報をもたらすことになる。そのひとつはここに語られるように継母の父と結婚する以前の経歴に関するものであるが、継母の本名は「静」（決定稿では「経子」といい、その生れた家は二条辺の「色紙短冊筆墨の類を商つてゐた大きな構への店」であつた。が、十歳余りのときに倒産して、十二歳で祇園の某家に養女として身売られ、十三歳から十六歳まで舞妓をしていたという。そして十六のとき、綾小路西洞院の木綿問屋の若主人に身請けされ、その家の嫁に迎えられて、足掛け四年、大商店の若奥さんに納まっていたが、十九で事情があつて不縁となり、その後六条辺に逼塞していた両親の家に戻り、二階を稽古場にあて、隣り近所の娘たちに茶の湯や生け花を教えていた。父が継母と知り合つたのはその頃だつたらしいが、どういう機会に逢つたのか、それから五位庵へ嫁いでくるまでどこで逢瀬を重ねていたのか、それらのいきさつは分からないというのが、そのあらましである。

この乳母がはじめに語つた継母の前歴を明かすところは、父の意向をうけてのものだつたと見て間違いない。のちに父が腎臓結核に冒され、残された命があと一二年であることを医師から告げられたとき、糺は「去年乳母が暇を取る時、糺の森の参道を歩きながら私に洩らした今の母の前半生の物語を思ひ起し」て、「あの時乳母は『旦那さんには内証でござりますけど』と云つてゐたが、或はあれは、父が乳母に命じて殊更に云はせたのではあるまいか。父は今後何かの場合に、私の頭の中でつながらつてゐる生みの母とまゝ、母との連絡を、こゝらで一応絶ち切つておいた方がいゝと考へる理由があつたのではないか」といつているからである。主人公に生母と継母の区別をなくさせるようとりはからつたのも父の意向ならば、また生母と継母の連絡を絶ち切らせるように仕向けたのも父である。そして、ここにいる「何かの場合」とは明らかに父の死であり、そうした方がいいと考へる「理由」とは、その後展開される父から息子への妻譲渡の目論見からである。とするならば、この時点で父はみずから不治の病に冒され、余命いくばくもないことを知つたと判断してもいいことになる。

が、それはともかく、こうした継母の前歴は、直ちに私たちに『吉野葛』の津村の母を思い起こさせる。『吉野葛』において「母は美は、大和からすぐ彼の父に嫁いだのではなく、幼少の頃大阪の色町へ売られ、そこから一旦然るべき人の養女になつて輿入れをしたらしい。それで戸籍面の記載では、文久三年に生れ、明治十年に十五

歳で今橋三丁目浦門喜十郎の許から津村家へ嫁ぎ、明治二十四年に二十九歳で死亡してゐる」と設定される。幼いころ一旦色町に身をおきながら、しかる後に堅氣の家に嫁ぐという境遇において両者は共通しているが、思えば谷崎の最初の妻となった千代夫人も若いころ一旦芸者となり、その後谷崎と結婚したわけである。が、『吉野葛』の津村の母および『夢の浮橋』の継母の境遇のヒントになったのは、千代夫人というよりも、妹尾健太郎の夫人君子だったとみてはば間違いないだろう⁽²⁾。

野村尚吾の『伝記谷崎潤一郎』では妹尾健太郎について、「潤一郎が『黒白』を連載したさい抜擢した新進の日本画家中川脩造の紹介で訪問するようになり、その後は双方が三日にあげず往来する間柄になっていた」といい、「とくに夫人の君子は、数奇な生涯を歩んだひとだが、気さくで人づきあいのよい才気が、潤一郎の氣に入っていた」とある。秦恒平の『神と玩具との間 昭和初年の谷崎潤一郎』は未発表の妹尾健太郎宛谷崎書簡を紹介しながら、昭和初年代の谷崎文学に妹尾夫婦がいかに深くかかわっていたかを検証しているが、この妹尾夫人について「或る商家の若旦那と行儀見習いの娘との間に生まれ、生後まもなく貰い子に出されたものの、養家も零落、十歳にならぬ前に自分の意志で狭斜の巷に身を寄せた人だったという」とある。また『谷崎潤一郎家集』には「昭和十二年十一月下旬妹尾夫人急死す、ゆかりの月と云ふ舞を好みて舞ひし人なりければ」との詞書きを添えて、「面かげの忘れなくに秋の夜はゆ

かりの月の影の冴ゆれば」と詠み、さらに日をかえて「妹尾夫人をおもひて」の前書で、「傘さして舞ひけん人をしのべとや昨日もけふも淡雪のふる」と詠んでいる。谷崎の妹尾夫人への思いがいかに深いものだったかを推測し得るが、大谷晃一の『仮面の谷崎潤一郎』では、昭和四年の谷崎を描きながら、妹尾健太郎夫婦について次のように記している。少々長いが、引用してみたい。

妹尾健太郎が同じ本山村の北畑坊ノ前へ、大阪から引越して来た。(中略)

妹尾家は新婚早々であった。妻はキミという。彼女は西宮の生まれで、三十一歳。夫の健太郎より五つ年上であった。家が落魄して十五の年に大阪難波新地のお茶屋の養女になった。翌年、せのや文具店主人の妹尾秀三郎に見せめられ、落籍される。その次の年に、長女の光子を産んだ。十七歳だった。が、キミは器用で頭がよく回り、しつかり者である。茶屋遊びにふける秀三郎を措いて、てきばきと店を切り回した。島の内の商家の御寮人様である。夫と生さぬ仲の姑に仕え、夫の亡兄の遺児である健太郎の面倒を見た。

健太郎は二つのときに父が日露戦争で戦死した。五つで母を亡くした。キミは母を知らない健太郎に同情している。夫は妻も商売も顧みない。とうとう、心身の過労のために体をこわし、ひどい喘息で二度も昏倒した。養生のために、南海沿線の岸の里に住む。健太郎も一緒に行った。親戚がとやかく言い出した。

秀三郎は甥の健太郎に妻キミを譲る。こうして、健太郎はキミと本山本へやって来た。光子を連れて。

このキミの身の上話と一緒にしたいきさつを聞いたとき、潤一郎の目が生めかしく光った。

谷崎はこうした生い立ちの妹尾夫人の、健太郎と結婚するまでの半生を、小説にしようと君子夫人の談話を筆記し、「お梅」というタイトルで冒頭を書きはじめてさえたことが、全集に収録されている昭和三十三年九月四日付の伊豆山から大島の妹尾健太郎へ宛てた書簡によって分かる。これも長いが、重要なものなので引用しよう。

先般京都ではお忙しい中を度々おいで下さつて有難うございませす

その後私も熱海へ帰り書斎を整理してをりましたが意外にも思わぬ古い手文庫の中から往年の「お梅」の古原稿を発見いたしました、焼失したと思つてゐたものが幸運にも保存されてゐた訳であります、原稿は二種類ありまして、一つはきみ子夫人の談話の一部を筆記したもの、一つは小説「お梅」の冒頭の二二章で、これはたしかに私の書いた創作の文章であります、但し二種とも私の直筆ではなく恐らくは丁未子（鷺尾夫人）か誰かに筆写せしめたものと思へます、赤裏の話や童話なども出て来まして此の上もなく懐しい気がいたします、失礼ながら先日のお話よりも、この君子さんの筆録の方が遙かに芸術的

要素に富んでをりますので、これを生かすことが出来れば或は小説が作れるのではないかと存ぞんへてをります

兎も角も早速君にお見せして御感想や御意見を伺ひたいので、二種の原稿を別便を以てお届けいたします、御覧になりましたら何卒なるべく早く御返送下さるやうにお願ひいたします

私の今の考では君子さんの生い立ちよりあなたと恋に陥る迄の半生を一つの物語にしたいのですが、それにしても昔の大阪の風俗や地理をもう少し詳しく知らなければ、これだけでは十分なので、あなたがこの筆録を読んで補足して下さいには行きませんか

丁未子夫人もあの当時傍で聞いてゐた筈ですから彼女も何か補足するやうな材料を記憶してはゐないでせうか

兎も角も御精読の上御考慮を願ひます

谷崎は丁未子との結婚生活中に一度「お梅」に着手したというのであるから、それは昭和六年のことであつたらう。昭和三十三年になって谷崎はふたたび妹尾夫人の半生を描く「お梅」を取りあげようと、わざわざ妹尾健太郎を京都に呼び寄せてその話を聞き直している。そのときに同席して妹尾の談話を筆記したのは渡辺千萬子さんで、千萬子さんの話によれば、妹尾の話は自己の恋愛談に始終してしまい、谷崎の関心をいまひとつ惹かなかつたようである。が、谷崎は、その直後に「お梅」の旧稿と君子夫人の談話筆記を古い手文庫から発見したわけで、この手紙はその折の谷崎の興奮がそのま

ま伝わってくるような筆致である。

順当にゆきさえすれば、おそらく谷崎はこのとき「お梅」の執筆にふたたび取りかかったのだろうが、妹尾との何らかの行き違いがあり、結局「お梅」は執筆されずじまいにおわってしまったようだ。

同年九月二十二日付の妹尾健太郎宛書簡（書留）で、谷崎は前便に対する返事がないことを心配し、次のように書いている。

長いことお手紙が来ないので一寸案じてゐるのですが別に
変りはありませんか

多分今月の上旬、九月五六日頃と記憶しますが、手紙と原稿とを書留便を以てお届けしましたが、それに付何の御返事もないので気になつてゐます

書留便の原稿と云ふのは、その後図らずも古い手文庫の中から、紛失したと思つてゐた往年の「お梅」の原稿と、貴下の先夫人の談話筆記とが出て来ましたので、驚喜のあまり、何は措いても貴下にお目にかけてたいと存じ、それをそのまま、大島のお宅あてに発送したのです、コッピーを作つて置かなかつたので、御覧になつたら即座に返送して下さいやうに、そして御感想を洩らして下さいやうに、別に手紙をも上げたのですが（手紙の方が原稿よりも一日早く着いた筈）それに対し今日まで貴下からお便りがないので、不安を感じてゐるのです

まさかあの手紙や原稿が不着の筈はないと存じますが、至急何とかお便りを下さい、気になりますから

末筆ながら奥さんに宜しく

ここにどのような事情があり、その後谷崎と妹尾の関係がどうなつたかも分からないが、ともかく現在も「お梅」の原稿は所在不明である。このときに妹尾が協力的でありさえすれば、谷崎は『夢の浮橋』に代わつて、おそらく「お梅」を執筆していたはずである。

『夢の浮橋』の口述開始が昭和三十四年七月十六日であるから、谷崎が妹尾へ「お梅」の原稿の返送を催促する手紙を出したのは、その十ヶ月ほど前ということになる。何らかの事情で「お梅」の執筆が不可能になつたとき、それに代わる作品として着手した『夢の浮橋』に、その「お梅」のモチーフを吸収したとしても不思議ではなく、『夢の浮橋』の継母の前歴には妹尾夫人君子のそれが色濃く反映されていたとみなしても差し支えないだろう。いや、『夢の浮橋』は『源氏物語』から影響をうけた息子と義母の密通の物語という以上、父から息子への妻譲渡の物語であり、それは伯父から甥への妻譲渡の物語であつた「お梅」を換骨奪胎したもので、舞台を大阪から京都へ移し、作者自身の境遇を交えながら再構築された作品だつたとみて間違いないようである。

注

（一）谷崎が『国歌大観』を参照したことは間違いないと思われる。『国歌大観』には、

隠り沼の下より生ふるねぬなはの寝ぬ名は立たじ来るな厭ひそ

と、「寝ぬ名は立てじ」を異本扱いとして、「寝ぬ名は立たじ」と表記している。

冒頭に引かれたものと本文中のものと漢字の当て方が違っているが、後者のものが『国歌大観』のものと同じところから、『国歌大観』を参照していいことは疑いない。

(2) 妹尾夫人の名前に関して谷崎は「君子」と表記し、のちに引用するように大谷晃一のみが「キミ」としている。私自身、妹尾夫人に関して調査したわけだが、おそらく戸籍上の名前は、大谷が記しているように「キミ」であったかも知れない。が、ここでは谷崎が書いているように「君子」と表記することとする。なお中河与一の『探美の夜』は、小説ということもあって、これまでの谷崎研究において不当に無視されつづけてきたが、早い時期に周辺を実に丹念に取材して、執筆されたもののように、示唆に富むところも少なくない。ここに本書から妹尾君子を描いている箇所を引用しておくが、() のなかは私が補ったモデル名である。

潤一郎がまだ水道筋の小学校の前にいた頃、住吉の近くに妹尾銀一(健太郎)という青年画家がいた。

彼は大阪の道頓堀に沢山の借家を持ち、十荘に商業学校を持っている青年で、夫人の絹子(君子)は、その強力な財力を背景に、稀にみる美貌と機智とをもって、云ってみればその頃の阪神の社交界で評判の才女であった。

当時大阪の富裕な商人達の間では、好んで阪神間に住宅を構えることが流行り、そこから店へ通う者が多くなっていた。ためにその夫人達は急に用事がなくなると、自然遊芸に親しみ、そうでなければ放蕩に流れるような空気を作りだしたがちであった。

妹尾絹子が知人の紹介で初めて潤一郎の家に行った時、彼女は猫好きの潤一郎への土産に、グレーの美しいベルシヤ猫を一匹バスケットに入れて持参した。銀色と云った方が適当かもしれなかった。

極端に有名人好きの彼女が、潤一郎に逢って急に親しくなると、彼女は住吉の近くの岸の里から水道筋の彼女の家の近くに引越して来て、毎日のように潤一郎のところに入り出すようになった。口もとの可愛い細面が可憐にみえた。

「先生は関西のことをお知りやありませんし、どんなことでもお教えしませ。」

「あなたなら人間の裏の裏まで知っているだろうからね」

「そりゃ着物の裏でも、人間の裏でもみんな見透しですよってなア、何んでも教えてあげますわ」

谷崎潤一郎『夢の浮橋』草稿の研究(千葉)

彼女は甘い抑揚のある声で云った。

彼女の前身は宗右衛門町でも人目をひく半玉で、何しろ小さい時から踊りもうまかったし、歌も三味線も人並みに優れてうまかった。関西人らしいアケスケと、人をそらさぬ頭のよさは生得であったが、そのうえ彼女はずぬけた機転と放埒な社交術を、次第に身につけてどこへ出してもひけをとらぬあざやかな女性になっていた。彼女は初め銀一の叔父と一緒にあって女の子まで生んだが、その後別れて、彼女よりずっと歳下の現在の主人と結婚して、今は思うままな華美な生活を送っているのであった。

所謂芦屋夫人と云われてその頃ジャーナリズムにクローズ・アップせられた部類の最も典型的な有閑夫人の一人であった。彼女は完全にその辺の社交界の主導権を握り、周囲からの信頼と親しみを一身に集めていた。